3．診　　療　　部

目　次

糖尿病内科 …… 25
脳神経内科 …… 26
消化器内科 …… 28
循環器内科 …… 30
外科 …… 31
脳神経外科 …… 33
整形外科 …… 34
眼科 …… 35
泌尿器科 …… 36
麻酔科 …… 37

糖　尿　病　内　科

（1）スタッフ

医員（講師）　　大西　峰樹
医員（助教）　　八木　愛
医員（非常勤）　宮脇　正博、木村　凪沙、藤吉　奈々子

（令和５年３月31日現在）

（2）特徴

糖尿病内科は、常勤医２名および非常勤医３名による週４回の専門外来で、糖尿病を中心に、脂質異常症、高尿酸血症などの代謝性疾患の診断・治療を行っている。また常勤医による、糖尿病コントロール入院を精力的に行っている。

当科ではチーム医療を重視しており、現在、当院糖尿病専門チームには日本糖尿病療養指導士が３名在籍し、栄養指導、フットケアなど、チームとして糖尿病患者さんへのケアに取り組んでいる。

例年は月に１回、主に外来通院の患者様を対象に、糖尿病の病態、食事・運動・薬物治療その他に関する知識の教育を目的とした糖尿病教室を行っているが、昨年と同様にコロナ禍であったため、中止せざるを得なかった。状況を見つつ糖尿病教室を再開し、糖尿病に関する知識を広めることで、慢性的に続く高血糖や代謝異常による網膜症、腎症、神経障害、細小血管障害、皮膚感染などの合併症を予防し、患者様の生活の質（QOL）を保つことに貢献していきたいと考えている。

（3）診療実績

＜外来診療実績＞

・フットケア外来受診数　　55件
・CGM 検査件数　　12件

＜入院診療実績＞

・糖尿病コントロール入院　７件

＜外来糖尿病教室実績＞

・コロナ禍により2022年度は中止

（4）今後の目標

前年度に引き続き、糖尿病教育入院の円滑化にむけてクリニカルパスの運用を行い、改善点が発生次第、更新を行ってきた。また、開催できなかった糖尿病教室について、来年度に新型コロナ感染症が5類感染症になり、治療薬の開発やワクチンの接種が普及されれば、再開する予定である。

脳　神　経　内　科

（1）スタッフ

名誉病院長　　木村　文治
特務講師　　宇野田　喜一
医員（非常勤）　太田　真

（令和５年３月31日現在）

（2）特徴

「脳神経内科」専門施設として近畿厚生局から認可を受けており、対象疾患としては、脳血管障害（脳梗塞、脳出血など）、脳髄膜炎、アルツハイマー病などの認知症、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症などの神経難病、神経免疫疾患（重症筋無力症、多発性筋炎、ギラン・バレー症候群など）、片頭痛などです。基本方針や特色地としては神経難病から頭痛まで、幅広く神経内科疾患に対応しております。また、脳神経外科、整形外科およびリハビリテーション科などとも密に連携をとりながら診療を行っております。

（3）入院診療実績

ICD 病名	2019年	2020年	2021年	2022年
パーキンソン病関連疾患	77件	73件	51件	8件
脳血管疾患の続発・後遺症	48件	140件	68件	17件
神経系の変性疾患，詳細不明	37件	30件	9件	5件
脊髄性筋萎縮症および ALS	30件	36件	18件	7件
てんかん	6件	6件	5件	5件
炎症性多発（性）ニューロパチ＜シ＞ー	6件	6件	1件	2件
他に分類されるその他の疾患の認知症	5件	5件	3件	4件
その他のミオパチ＜シ＞ー	2件	6件	0件	2件
重症筋無力症	4件	0件	6件	4件
アルツハイマー病の認知症	5件	2件	3件	0件
一過性脳虚血発作および関連症候群	5件	2件	2件	0件
多系統変性（症）脊髄小脳変性症	11件	7件	9件	4件
髄膜炎	1件	2件	1件	0件
多発（性）ニューロパチ＜シ＞ー CIDP	1件	2件	0件	0件
その他の脳炎，脊髄炎および脳脊髄炎	1件	2件	3件	3件
その他の舞踏病	1件	0件	2件	0件
原発性筋障害	1件	0件	0件	0件

ICD 病名	2019年	2020年	2021年	2022年
限局性脳萎縮（症）	1件	0件	9件	0件
高血圧性脳症	1件	0件	0件	0件
細菌性髄膜炎，他に分類されないもの	1件	3件	1件	0件
多発性硬化症	1件	1件	0件	0件
中枢神経系のその他の脱髄疾患	1件	1件	0件	0件
脳実質外動脈の閉塞および狭窄	1件	1件	1件	0件
片頭痛	1件	0件	0件	1件
脳腫瘍	0件	9件	1件	0件
総計	248件	334件	193件	62件

その他の入院診療実績として、新型コロナウイルス感染症患者の受け入れを積極的に行った。

2022年度その他の入院診療実績

Covid-19	139件

（4）今後の目標

「新しい時代へ　共に育み　チームワークで取り組む　信頼の地域医療」をスローガンに、急性期から回復期、慢性期までカバーし、難病医療に特徴を有する施設として安心で安全な医療を提供したいと考えています。

消　化　器　内　科

（1）スタッフ

内科統括部長（特務教授）　　瀧井 道明
消化器内科部長（臨床教育教授）　中畑 孔克
医員（非常勤）　大坂 直文、箱田 明俊、富田 光貴、山口 亮介、阪本 洵、右馬 悠暉、桶本 大

（令和５年３月31日現在）

（2）特徴

・消化器疾患は対象臓器が広く、腹部症状も多様で画像診断の占める割合が高いので、専門医による迅速な画像検査体制を整備している。平成30年度から始まった高槻市胃がん内視鏡検診の対象者を広く受け付けている。大腸がん検診（便潜血反応）で要精密検査判定の方は、紹介を頂ければ早急に大腸内視鏡検査を予約、施行している。

・当科は大阪医科薬科大学病院消化器内科との連携体制が整備されており、当院で診断・治療が困難と考えられる場合には、迅速に大阪医科薬科大学病院消化器内科に紹介し対応している。例えば、総胆管結石などによる閉塞性黄疸、急性胆管炎に対しては、早急に大阪医科薬科大学病院消化器内科胆膵グループに紹介して、内視鏡的胆汁ドレナージなどの処置を施行してもらっている。

・入院患者では、言語聴覚士（ST）による嚥下機能評価、栄養サポートチーム（NST）による栄養状態評価を積極的に行った上で、病態に応じた適切な栄養療法の導入に努めている。高度の嚥下摂食障害があり経鼻胃管栄養が長期間に及ぶ患者には、経皮内視鏡的胃瘻造設術（PEG）を施行している。高齢者で診断困難な急性腹症の症例に対しても、当院外科に迅速に相談可能な体制を整えている。また、肝硬変などの難治性腹水に対しては、他科にコンサルトして、適応があれば腹水濾過濃縮再静注法（CART）や腹腔・静脈シャント術を施行し、高度黄疸に対してはビリルビン吸着療法も施行可能である。

・外来診療は専門分野に応じて計６名の医師により行っている。薬物治療として、ヘリコバクター・ピロリ菌感染性胃炎に対する除菌療法、Ｃ型慢性肝炎に対するインターフェロンフリーの経口抗ウィルス剤治療、Ｂ型慢性肝炎に対する経口核酸アナログ製剤治療なども行っている。

・消化器疾患が疑われる高齢の患者で、外来通院での検査が困難な場合には、短期間の検査入院も行っている。

（３）診療実績

＜主な検査・処置件数＞

	2020年度	2021年度	2022年度
１）上部消化管内視鏡検査総数	815件	633件	623件
・高槻市胃がん内視鏡検診	42件	45件	43件
・経皮内視鏡的胃瘻造設術（PEG）	28件	22件	12件
・内視鏡的止血術	9件	6件	7件
２）大腸内視鏡検査総数	464件	288件	275件
・ポリペクトミー	218件	141件	148件
・EMR	127件	50件	43件
３）消化管造影検査総数	35件	25件	25件
・上部消化管造影検査	13件	12件	12件
・注腸造影・小腸造影検査	11件	5件	6件
・イレウス管挿入・造影	11件	8件	7件
４）小腸カプセル内視鏡検査	5件	3件	0件
５）腹部超音波検査	446件	378件	423件

（４）今後の目標

・慢性便秘症をはじめとして、少しでも腹部症状・不定愁訴のある患者、消化器疾患を心配されている患者を広く受け入れていく。

・検査・処置の件数の増加のみならず、大学付設の病院として診療の質的な向上を目標とする。当院外科や大阪医科薬科大学病院消化器内科との連携をさらに強化して、常にベストな治療方針を選択できるように努めていく。すなわち、地域医療に根ざしながらも地域医療の高質化を目標としていく。

・高齢の入院患者では、消化器疾患のみならず慢性疾患が複合的に併存していることが多く、長期の臥床によりADLが低下しやすい状況にある。そこで、早期にリハビリテーションを開始し、栄養療法を積極的に導入するなど、消化器疾患を中心とした全人的な総合内科診療を目標としていく。

循　環　器　内　科

（1）スタッフ

医員　渡邊智彦　藤岡慎平　坂口雄哉　芦邊祐規

（令和５年３月31日現在）

（2）特徴

循環器疾患全般に対応する。外来および入院診療をはじめとし、他科とも連携を図り診療に当たっている。大阪医科薬科大学循環器内科から常勤医が派遣されており、外来診療、ペースメーカー外来、心エコー検査、エルゴメーター負荷心電図、CT 検査、また当直業務の一部に携わっている。

（3）診療実績

・外来診療では、内科外来、循環器内科紹介診、ペースメーカー外来、術前外来を行っている。
・入院診療では、心不全、不整脈、虚血性心疾患等を対象としている。
・外来検査では、心電図、ABI、心エコー、ホルター心電図、冠動脈 CT、エルゴメーター負荷心電図が施行可能である。
（心エコー：745件、ホルター心電図：76件）
・入院検査では、心臓カテーテル検査（38件）を行っている。
・治療として、一時的ペースメーカー留置術を行っている。

（4）今後の目標

ご高齢の患者さんが多く、心不全の患者さんが多く来院されている。大阪医科薬科大学病院と連携を図りつつ、Covid-19 感染対策を十分に行い、紹介診や検査を適切に実施し、さらなる実績を重ねていきたい。

外　　科

（1）スタッフ

部長　　出原　啓介
医師　　大路　博

（令和５年３月31日現在）

（2）特徴

一般・消化器外科、乳腺外科を担当する常勤医師２名及び非常勤医師１名の合計３名で診療を行っている。乳腺（岩本充彦医師）外来を行っている。

外科では、一般・消化器外科（大腸癌、胃癌、胆石、ヘルニア、痔核、虫垂炎、ポート造設など）の手術を行っている。また、化学療法、終末期医療も行い、大阪医科薬科大学形成外科医師による褥瘡回診、WOC Nrs、当院外科医師による褥瘡予防回診にて褥瘡の新規発生予防および治療に取り組んでいる。そのほか、本院もしくは他院にて手術を受けた患者さんの術後リハビリおよび在宅復帰までの支援や療養環境の提供も行っている。

（3）診療実績

＜手術実績＞

	2020年度	2021年度	2022年度
食道手術	1件	0件	件
胃悪性腫瘍手術	10件	3件	1件
大腸悪性腫瘍手術	24件	11件	16件
大腸良性疾患手術（捻転、人工肛門造設、閉鎖）	20件	15件	6件
肝切除術	56件	7件	0件
胆嚢炎、胆嚢内結石、総胆管結石症手術	40件	30件	18件
膵臓手術	1件	0件	0件
ヘルニア手術（鼠経・臍・腹壁）	28件	23件	45件
肛門手術	12件	7件	7件
血管手術	2件	0件	0件
中心静脈ポート手術	51件	30件	8件
腹腔・静脈シャント手術	11件	2件	0件
虫垂炎手術	5件	8件	4件
その他（体表手術など）	24件	34件	8件
計	285件	170件	113件

手術は基本的に腹腔鏡下手術にて施行している。

（4）今後の目標

Covid-19 の影響で手術件数が減少した。来年度は感染対策を十分に行いながら、良性・慢性期疾患をはじめとする安全な手術治療およびリハビリテーションの提供を行っていく。

脳　神　経　外　科

（1）スタッフ

部長　　西原賢太郎
医員（非常勤）　梶本　宜永

（令和５年３月31日現在）

（2）特徴

脳神経外科専門医１名が勤務している。急性期、療養、地域包括ケア、回復期リハビリの各病棟があり、患者さんの病態に応じた入院加療を行っている。大阪医科薬科大学病院、近隣病院、地域開業医、施設など幅広く紹介をいただいている。外来診察に於いては、緊急性が高いと考えられる場合には速やかにCT、MRIを実施している。重症脳卒中については、大阪医科薬科大学病院脳神経外科の応援体制の下、緊急開頭手術や血管内治療を実施している。

（3）診療実績

・手術件数

手術内容	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
経皮的椎体形成術	0	0	11	14	2
頭蓋内血腫除去術	0	0	6	4	0
穿頭術	5	8	5	11	9
脊椎固定術	0	0	2	3	0
腫瘍摘出術	0	2	1	1	1
クリッピング術	1	1	1	1	0
脳血管内手術	0	2	0	5	0
その他	5	5	12	8	3

（4）今後の目標

脳卒中を発症しても、早期に脳神経外科医による診察を受けることができれば、それだけ回復率は高くなる。北摂地区には脳神経外科を標傍する病院が本当に少なく、当院としても大阪医科薬科大学病院との連携を強化しながら、北摂地区の脳神経外科医療グループの一員として少しでも地域に貢献できればと考えている。当院では脳梗塞超急性期に於いての血栓溶解療法（ｔ‐ＰＡ投与）が主な治療方針となっている。患者さん、ご家族さんに十分なインフォームドコンセントを行い、安全で質の高い医療を提供していく。

整　形　外　科

（1）スタッフ

副院長　　金　明博
医員　　中野敦之、木澤桃子、高井亮輔
非常勤医師　　３名

（令和５年３月31日現在）

（2）特徴

外傷、慢性疾患に関わらず、整形外科全般に渡る診療を行っている。中でも脊椎や関節の慢性疾患、四肢の骨折、外傷を専門分野としており、脊椎固定術や人工関節置換置換術、観血的骨接合術などの手術療法を積極的に実施している。

（3）診療実績

手術件数　253件

主な術式	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
観血的骨接合術	56件	68件	43件	62件
脊椎手術	20件	32件	77件	123件
人工関節手術	23件	26件	19件	26件
その他	57件	19件	46件	42件

（4）今後の目標

整形外科疾患・外傷全般にわたり安全で適切な診断・手術を行いリハビリテーションにつなげ、早期に患者さんが元の生活に戻ることができるよう、より一層の医療の質向上を目指します。

眼　　科

（1）スタッフ

医員　　小嶌　祥太
医員　　吉岡　千紗
医員（非常勤）　舟橋　順子
医員（非常勤）　佐藤　孝樹

（令和５年３月31日現在）

（2）特徴

当院眼科では、月曜日から金曜日の午前中に眼科全般の外来診療にあたっており、毎週木曜日午前は佐藤孝樹医師の網膜疾患専門外来を設け、硝子体手術適応の方は当院で手術を行っている。また毎週月曜日午後には小嶌祥太医師による緑内障専門外来を設けている。

（3）診療実績

2022年度は白内障手術248件、硝子体手術11件を施行している。白内障手術は日帰り・1泊2日・2泊3日で対応しており、入院中及び退院後の生活まで時間をかけて丁寧に説明し、患者様また家族さんの不安を少しでも軽減できるよう心がけている。

	2020年度	2021年度	2022年度
白内障手術	269件	200件	248件
硝子体手術	17件	6件	11件
眼形成	57件	32件	0件

（4）今後の目標

白内障手術、硝子体手術を引き続き行い、さらに当院で可能な治療内容を充実させ、少しでも多くの患者さんのQOV（Quality Of Vision）向上のため努力していきたいと考えている。

泌　尿　器　科

（1）スタッフ

医員　辻野　拓也、川床　友哉

（令和５年３月31日現在）

（2）特徴

・泌尿器科は、小児から成人、高齢者にいたるまでの泌尿器疾患（夜尿症、停留精巣など）、尿路、性器の各種がん（膀胱がん、前立腺がん、腎がん、精巣がんなど）、尿路結石症、前立腺肥大症、尿失禁、尿路感染症（腎盂腎炎、膀胱炎など）、性感染症（尿道炎）などの泌尿器科疾患の全般について診療・治療を行っている。過活動膀胱、神経因性膀胱、尿路結石、悪性腫瘍などの治療を行っている。

・PSA 検診異常（4.0ng/ml 以上）、積極的に前立腺生検、膀胱鏡検査、画像検査など行い精査加療を行っている。

（3）診療実績

（件）

手術名称	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
経尿道的尿管ステント留置術	44	32	17	23
経尿道的前立腺切除術（TUR-P）	0	8	1	1
経尿道的膀胱腫瘍切除術（TUR-BT）	19	10	10	6
内シャント設置術	6	9	7	1
経尿道的尿管ステント抜去術	3	1	0	2
経皮的腎（腎盂）瘻造設術	2	0	2	3
血管移植術	3	3	0	0
腎（尿管）悪性腫瘍手術	2	2	0	0
その他	17	8	1	0
合計	96	37	38	36

前立腺生検	13	1	6	0

（4）今後の目標

感染対策を徹底しつつ、悪性腫瘍の早期発見や透析管理、術後のリハビリなど、多様な患者に安全安心な医療を提供する。

麻　　酔　　科

（1）スタッフ

麻酔科部長（特務准教授）　　辰巳　真一

（令和５年３月31日現在）

（2）特徴

麻酔科は、常勤医師１名、水曜日の麻酔を担当する非常勤医師１名の２名体制で、平成28年４月に診療科として設置された。

主に手術麻酔を担当し、現在のところ外来診療は行っていない。

（3）診療実績

	2020年度実績（件）	2021年度実績（件）	2022年度実績（件）
全身麻酔（吸入）	370	276	295
全身麻酔（TIVA）	20	45	34
鎮静	52	35	51
脊髄くも膜下麻酔	10	11	13
合計	452	367	393

（4）今後の目標

手術件数の増加、および大侵襲手術の増加に対応して、安全な周術期管理、患者満足度の高い麻酔のための環境を整えていく。

4．看　　護　　部

目　次

看護部 …… 39
南 2 階病棟（一般急性期外科病棟） …… 48
北 2 階病棟（一般急性期内科病棟） …… 50
南 3 階西病棟（地域包括ケア病棟） …… 52
南 3 階東病棟（医療療養病棟） …… 53
北 3 階病棟（回復期リハビリテーション病棟） …… 55
外来 …… 57
手術室・中央材料室 …… 59
血液浄化センター …… 60

看　　護　　部

（1）スタッフ

・看護部長　　松本　加奈
・看護副部長　　福富　美樹
・看護副部長　　愛場　佐緒理
・看護参事　　東　典子

（令和５年３月31日現在）

（2）特徴

[看護部基本方針]

私たちは、一人ひとりの患者さんの権利を尊重し、専門知識と技術・おもいやりのある看護を提供します

[看護部重点目標]

1．安全・安心なエビデンスに基づく質の高い医療・看護の提供
2．一人ひとりを尊重した働き続けられる職場環境づくり
3．堅実な経営への積極的参加

[看護部重点目標　項目詳細]

1．安全・安心なエビデンスに基づく質の高い医療・看護の提供
　1）COVID-19 重点医療機関としての役割遂行
　　感染対策の強化によるクラスターの防止（COVID-19、疥癬）
　2）リスク感性を高め、転倒・転落、患者誤認、薬剤関連インシデント・アクシデント件数の減少
　3）倫理的感受性を高め、安全安心な看護の提供
　4）看護師・准看護師・看護補助者協働のための体制整備
　5）チーム医療、タスクシフト・シェアの実践　入退院支援加算１算定
　6）認定看護師による継続支援委員会の発足
2．一人ひとりを尊重した働き続けられる職場環境づくり
　1）大阪医科薬科大学病院・訪問看護ステーションとの連携を強化し、人材育成の充実を図る
　　・キャリアラダーシステムと新人事制度の確立
　　・中間管理職の育成
　2）一人ひとりの力が発揮できる目標管理と SSD の実践
　　・専門職としてのやりがい支援と帰属意識の向上
　　・倫理的感受性を高め、ハラスメントを防止する

・研修への主体的参加
・新採用者離職ゼロ、中途退職者の減少

3）労働環境の改善
・業務の標準化・業務改善による前残業含む時間外労働の減少
監督職の時間外労働の減少
・有給休暇取得率の向上平均13日／年（病休除く）

3．堅実な経営への積極的参加

1）ケアミックス型病院として効果的・効率的な病床管理・病床編成に伴うスムーズな移行
・COVID-19 の積極的受け入れ
・病床稼働率94％（南２：90％・東：95％・北３：95％）・病床回転率　平均2.2回転
・平均在院日数14日（急性期）
・入院述べ患者数3,440人／月・外来述べ患者数5,300人／月
・手術件数60件／月（全麻35件／局麻25件）
・心カテ件数　４件／月
・救急受け入れ拒否の改善　５％以下
・各病棟施設基準算定要件を満たす在宅復帰率

2）施設基準算定要件の堅持・新たな算定要件の検討
・看護配置・看護補助配置加算
・急性期看護補助体制加算
・夜間50対１急性期看護補助体制加算

3）支出抑制への貢献
・破損薬剤の減少

（３）活動内容と評価

[職員構成]

1．看護職員

	総数	常勤	非常勤
看護師	138名	119名	19名
准看護師	10名	６名	４名
看護補助者	28名	12名	16名
看護事務（看護補助者）	７名	５名	２名
計	183名	147名	31名

2．採用者

看護師（新人）	13名
看護師（中途）	９名
大学病院からの異動者	２名
看護補助者	５名

3．離職率

看護師（新人）	0％
看護師（准看護師を含む）	9.8％
看護補助員（助手、看護事務含む）	24.0%

[資格取得]

認定看護管理者研修ファーストレベル	1名
認定看護管理者研修セカンドレベル	1名

感染管理認定看護師	1名
特定看護師	1名

[教育内容]

2022年度看護部教育実績

1）院外研修

大阪府看護協会短期研修

月	研修内容	参加人数
5月	特別講演「これからの倫理と看護管理者の影響力～すべての看護師に専門職としての充実感を～」	1名
	診て聴いて触って実践に活かすフィジカルアセスメント（講義・演習）①	1名
6月	ACP支援専門人材育成に係る看護管理者研修	1名
	新人看護職員教育担当者研修	1名
	魅力的な研修会・勉強会の組み立て方	2名
	診て聴いて触って実践に活かすフィジカルアセスメント（講義・演習）②	1名
	【診療報酬に関連した研修】看護補助者の活用推進のための看護管理者研修①	1名
7月	摂食・嚥下障害のある患者の看護の基礎と実際を学ぶ	1名
	診て聴いて触って実践に活かすフィジカルアセスメント（講義・演習）③	1名
	共に育つための教育の基本的知識～心理学的アプローチ～	2名
	高齢者の特性を踏まえたエンド・オブ・ライフ・ケア	1名
	看護補助者の活用推進のための看護管理者研修	8名
8月	認知症高齢者の看護実践に必要な知識①（JNA収録DVD研修） 【診療報酬に関連した研修】	1名
	一般病棟において、予兆をとらえて急変を防ぐ観察と看護のポイント①②	12名
	診て聴いて触って実践に活かすフィジカルアセスメント（講義・演習）④ ※1日目オンライン	1名
	がん化学療法を受ける患者の支援	1名
	コーチング・コミュニケーション	1名
	【ファーストレベル公開講座】看護サービスの質管理「看護サービスと記録」	2名

月	研修内容	参加人数
8 月	【ファーストレベル公開講座】看護チームのマネジメント「准看護師への指示と業務・看護補助者の活用」	3 名
	看護補助者の活用推進のための看護管理者研修	2 名
	災害支援ナースの第一歩①～災害看護の基本的知識～	2 名
	救急・集中治療領域におけるクリティカルケア	1 名
9 月	がん患者の症状緩和を図る看護	1 名
	多職種協働とコンフリクトマネジメント～組織内のアサーティブなコミュニケーションに向けて～	1 名
	認知症高齢者の看護実践に必要な知識②（JNA 収録 DVD 研修）【診療報酬に関連した研修】	2 名
	災害看護における初期医療支援活動②	1 名
	対象の全体像把握のためのアセスメント	2 名
	高齢者施設で働く看護職員が抱える課題①～認知症高齢者の看護倫理～	4 名
	臨床で役立つ文章の書き方とポイント	4 名
	社会人基礎力を身に着け、自分の可能性を広げよう！	3 名
	ヘルシーワークプレイスをめざして	1 名
	認知症患者のケア～認知症患者が安心して医療を受けられるケアを考える～	5 名
	チームで取り組む医療安全「やってみよう Team s tepps」	2 名
	看護補助者の活用推進のための看護管理者研修	3 名
	実践に活かす静脈注射・輸液管理の基本知識～デバイスの特徴と使用頻度が高い薬剤～	1 名
	共に育つための教育の基本的知識～教育方法～	4 名
	みんなで考える看護倫理：基礎編	1 名
	みんなで考える看護倫理：基礎編	1 名
	医療安全管理者養成研修	2 名
10月	認知症高齢者の看護実践に必要な知識③（JNA 収録 DVD 研修）【診療報酬に関連した研修】	2 名
	【診療報酬に関連した研修】糖尿病重症化予防フットケア研修	1 名
	災害支援ナースの第一歩②災害看護の基本的知識	2 名
	より良い意思決定に向けたナッジの活用～看護現場をより良くする仕掛け～	2 名
	頑張る看護職のストレス対処法～アンガーマネジメントでストレス軽減～	2 名
	大阪府看護職員認知症対応力向上研修	1 名
	今すぐ使えるフレイル予防①	2 名
	高齢者の「食」を考える～肺炎を予防するための知識と実際～	3 名
11月	今すぐ使えるフレイル予防②	2 名
	ファシリテーションの基本を学ぼう	2 名
	医療安全の基本と医療事故防止行動	2 名
	感染管理の基礎知識	1 名

月	研修内容	参加人数
11月	認知症高齢者の看護実践に必要な知識④（JNA 収録 DVD 研修）【診療報酬に関連した研修】	2 名
	あらゆる場での看取りへの援助	2 名
	睡眠に関する視野を広げよう～眠れない時のアセスメントとケア～	2 名
12月	認知症高齢者の看護実践に必要な知識⑤（JNA 収録 DVD 研修）【診療報酬に関連した研修】	3 名
	人工呼吸装着患者の看護	4 名
	組織で取り組む感染管理	1 名
	慢性心不全患者の療養支援	2 名
1 月	看護記録のあり方を学ぶ①	3 名
	現場で活かす医療メディエーション	1 名
	外来看護と訪問看護でつなぐ在宅療養者への継続看護	1 名
	看護チームにおけるリーダーシップ	1 名
2 月	退院支援強化研修	1 名
	認定看護管理者教育課程修了者（セカンド・サード）フォローアップ研修	5 名
3 月	大阪府保健師助産師看護師実習指導者講習会フォローアップ研修	1 名

2）院内研修

【ラダーⅠ】新人看護師研修

月	研修テーマ
4 月	医療安全のための基礎知識Ⅰ
	感染対策についての基礎知識Ⅰ
	職業人としての日常生活上の注意点
	社会人基礎力について
	電子カルテと看護記録Ⅰ「看護記録の基本」
	スキルアップ研修Ⅰ「基本的な看護技術を学ぶ」
	スキルアップ研修Ⅱ「基本的な看護技術を学ぶ」
5 月	「夜勤を乗り切ろう」夜勤についてのガイダンス
	医療安全のための基礎知識Ⅱ（薬剤管理・与薬）
	スキルアップ研修　Ⅲ「BLS」Ⅳ「グリーフケア」Ⅴ「エンゼルケア」
	ピア・サポートⅠ「目標の看護師像を語り合う」
6 月	いきいきナースを目指して！
	「ストレスと上手に、つき合おう！」
	「倫理的感受性を高めよう！」～事例を通して学ぶ～
7 月	医療安全のための基礎知識Ⅲ（安全な輸血療法）
9 月	入退院支援～住み慣れた地域へつなぐ入退院支援～
	医療安全のための基礎知識Ⅳ「KYT」

月	研修テーマ
11月	ピア・サポートⅡ～半年の振り返り～
12月	「クリニカルパスの理解、看護サマリー」 サポートⅡ～半年の振り返り～
1 月	スキルアップ研修Ⅵ「活動・休息援助」「良肢位の保持」
2 月	褥瘡対策「スキンケア・褥瘡のアセスメント」
3 月	年間評価「看護を語ろう！」～自己評価と今後の課題～

【ラダーⅡ】 2 年目看護師研修

月	研修テーマ
10月	ケアの中の倫理的問題に気づく
11月	ステップアップ！救急看護
12月	訪問看護ステーション研修（1 日体験研修）

[実習受け入れ]

学校名	学生数
大阪医科薬科大学看護学部　広域統合看護学実習（慢性看護学領域）	2 名
大阪医科薬科大学看護学部　広域統合看護学実習（老年看護学領域）	8 名
大阪医科薬科大学看護学部　領域別看護学実習（老年看護学Ⅱ）	51名
藍野大学医療保健学部看護学科　老年看護学実習	10名
藍野大学短期大学部　基礎看護学実習	10名
藍野大学短期大学部　統合実習	5 名
大阪府病院協会　成人看護学実習	4 名
大阪府病院協会　看護管理実習	14名
淀川区医師会看護専門学校　老年看護学実習	18名
合　計	122名

（4）今年度の重点目標　評価及び課題

1．安全・安心なエビデンスに基づく質の高い医療・看護の提供

1）COVID-19重点医療機関としての役割遂行

感染対策の強化によるクラスターの防止（COVID-19、疥癬）

コロナ重点医療機関として、北 2 階急性期内科病棟をコロナ専用病棟とし、 4 対 1 HCU 加算を算定した。コロナ病棟は、通年平均約60％で稼働し、看護師を適正に人員配置することで診療報酬算定要件を満たし、補助金約15億円の収益となった。 8 月に急性期病棟で小規模クラスターが、感染対策を強化し、他部署への拡大はなく終息させることができた。

2）リスク感性を高め、転倒・転落、患者誤認、薬剤関連インシデント・アクシデント件数の減少

3）倫理的感受性を高め、安全安心な看護の提供

看護部の全体に対する報告割合は前年度52％、今年度45％で減少。報告例の患者影響レベル

は、今年度は4以上のアクシデントは0件。転倒・転落においても、レベルの高い事例が若干ではあるが減少した。患者誤認、薬剤関連事例においては、レベル2以上の事例は0件。特に重要な事例については看護部内で事例検討会を行い、安全対策委員会、リスクマネージャー会議とも連携している。看護倫理については各部署にて倫理カンファレンスを開催し、事例を検討した。今年度より安全対策室の体制強化を組織的に図ってきており、次年度は専従の医療安全管理者である看護師長も交代となるため、さらに体制を強化していくことが課題である。

4）看護師・准看護師・看護補助者協働のための体制整備

看護主任会を中心に看護補助者活用、協働について学習を深めるとともに、業務マニュアルの見直しを実施した。マニュアルの周知とともに、看護師・准看護師・看護補助者の業務指示の出し方、受け方の基準作成が次年度の課題である。

5）チーム医療、タスクシフト・シェアの実践　入退院支援加算1算定

褥瘡回診、栄養サポートチームの活動において、委員会メンバーを中心とした多職種チームのラウンドに参画。褥瘡発生率は昨年度1.4％から1.7％と上昇している。褥瘡回診・予防回診で患者リスクの正確な評価を実践に活かし、多職種チームで発生率低下に取り組むことが課題である。地域連携室、医事課等と連携し、9月より入退院支援加算1算定となった。

6）認定看護師による継続支援委員会の発足

感染管理・集中ケア・手術看護・皮膚・排泄ケア認定看護師による継続看護支援委員会を発足した。各々の専門分野について、勉強会を実施。また、倫理カンファレンスを推進し、各部署カンファレンス時に認定看護師がファシリテーターとしてアドバイスを行うことで、カンファレンスの充実を図った。

2．一人ひとりを尊重した働き続けられる職場環境づくり

1）大阪医科薬科大学病院・訪問看護ステーションとの連携を強化し、人材育成の充実を図る

・キャリアラダーシステムと新人事制度の確立

・中間管理職の育成

毎月の3施設教育担当者会議でOMPUラダーについて、課題の検討や情報共有を行った。OMPUラダー認可状況は、ラダーⅠ：92％、Ⅱ：100％、ラダーⅢ以降は、OMPUラダー導入移行期であり、Ⅲ・Ⅳキャリアアップとして研修を受講している。次年度もラダー研修受講を継続し、大学病院と連携して課題に取り組む。

ラダーⅠの新卒看護師がラダー評価に満たず1名保留となった。ラダーⅠの看護実践能力を身につけることができるよう2年目も支援を継続する。認定看護管理者教育課程ファーストレベル1名、セカンドレベル1名研修受講。中間管理職の管理者研修参加は、看護協会研修を中心に1件／人以上100％達成できた。研修での学びを実践に活かせるように日々の看護管理実践を支援していく。

2）一人ひとりの力が発揮できる目標管理とSSDの実践

・専門職としてのやりがい支援と帰属意識の向上

・倫理的感受を高め、ハラスメントを防止する

・研修への主体的参加

大阪府看護協会短期研修１件／人参加は85％達成。学会参加率は23％。学会参加については部署にて期初に年間計画を作成し計画的に進める必要がある。本学が今年度取り組んだ補助金事業である文科省リカレント事業でのWEB研修受講にも積極的に受講できていた。５月より病院内医師を講師とする多職種勉強会を開始し、全11回開催にて参加者延179名中看護職100名であった。今後も継続し評価していく予定である。

・新採用者離職ゼロ、中途退職者の減少

経験者採用は正職４名、アルバイト４名そのうち１年以内の離職者正職１名（理由は人間関係・能力不足)、アルバイト１名（転居)。今年度看護師長・副師長ワーキングでは、経験者の中途採用や部署間異動者が環境に適応し勤務ができるように支援計画を作成し運用を開始している。次年度に評価修正し活用する。

３）労働環境の改善

・業務の標準化・業務改善による前残業含む時間外労働の減少

監督職の時間外労働の減少

・有給休暇取得率の向上平均13日／年（病休除く）

昨年度より引き続き管理・監督職に対して労務管理研修を行い、有給休暇、時間外労働についての学習を継続した。有給休暇については、計画的に付与するようにし、平均取得日数目標値は14日と達成することができた。また、退職者の有給休暇についても看護の質が低下しない勤務表が作成できるように本人と話し合いながら、できるだけ計画的付与を推進するようにした。

時間外労働については、2023年３月よりシステム上の整備がなされ大学病院と同じ勤務時間へ変更した。日勤の始業時刻と夜勤の終業時刻が早まったこともあり、業務委員会・主任会を中心に各部署業務整理を行い時差出勤などを取り入れ対応した。

監督職の時間外労働は前年度を上回っている。看護師長不在の責任者が３部署あり、業務負担が考えられる。監督職の時間外労働の内訳は責任番業務がほとんどであるため、業務負担軽減と大学病院との連携による管理職の配置が課題である。

３．堅実な経営への積極的参加

１）ケアミックス型病院として効果的・効率的な病床管理（実績）

・病床稼働率89.6％　・病床回転率　平均2.1回転　・平均在院日数14.6日（急性期）

・入院述べ患者数3.562人／年　・外来述べ患者数4.496人／年

・手術件数53.5件／月（611件／年）

・救急受け入れ拒否　38.6％

地域連携室に看護師長を配置し、毎朝各部署責任者と病床管理ミーティングを行い、効果的・効率的な病床管理が行えるようにした。また、地域連携室室長医師とも連携を図り、病床管理委員会でも多職種と情報を共有し取組みを行った。結果ケアミックス病院として、急性期病棟からの退院支援を強化し平均在院日数を基準値以内にコントロールを実施した。

2）施設基準算定要件の堅持・新たな算定要件の検討

療養病棟において、看護職員を配置することで11月より夜間看護加算算定（16対１）を開始することができた。医療区分２・３の患者80％以上とADL区分の高い３の患者が50％以上という要件も加わり、要件をクリアするように入院患者と看護職員の勤務管理をすることができている。さらには、夜間看護職員配置を手厚くすることで、看護の質の向上と看護職員の時間外労働の削減など業務負担軽減を図ることができている。今後も地域医療連携室はじめ多職種と連携して、医療区分・ADL区分の高い患者の入院をコントロールする必要がある。2022年11月～2023年３月までの療養病棟夜間看護加算算定額は、3,746,650円であり、収入増に貢献できた。

3）支出抑制への貢献

薬剤部と連携し薬剤破損原因を分析することで前年度より破損金額を減少することができた。

南２階病棟（一般急性期外科病棟）

（１）看護体制・スタッフ

１）看護体制　　10：１（２交代勤務）

２）看護師（常勤）　　28名、（非常勤）１名

　准看護師（常勤）　１名

　看護補助者（常勤）６名、（非常勤）３名

　看護事務者　　１名

　　合計　29名　　（令和５年３月31日現在）

（２）特徴

病床数44床の一般・急性期外科病棟で診療科は外科・整形外科・脳神経外科・泌尿器科となっている。主な手術として、消化器外科では、開腹手術・腹腔鏡下手術・ポート造設術等、整形外科は、人工関節置換術、観血的骨接合術をはじめ脊椎手術等を幅広く行っている。その他にも泌尿器科、脳神経外科と多種多様な手術が行われ、それぞれの術式に応じた周手術期看護を行っている。令和４年度はコロナ対策の一環として内科病棟がコロナ専門病棟の機能を担ったため当病棟において一般内科も受け入れ、内科・外科の急性期混合病棟として運営し稼働率100％を超えることもあった。また当病棟でもコロナ対応を行い感染対策強化し新興感染症による危機的状況を乗り越えてきた。

現在、病床稼働率94％を目標にケアミックス病院の特色を活かした病床管理を行い、個々の患者に合わせた術前術後のケアや支援を行い、患者が安心して治療を受け、早期に社会復帰できるようなケアを提供している。また、高齢で手術を受ける患者も多く、入院時から地域医療連携室と情報の共有化、多職種との連携を行い、在宅療養や社会復帰を想定した退院指導を行い早期退院に向けた取り組みを行っている。

（３）活動内容と評価

１）ケアミックス病院の中の急性期病棟として、手術を受ける患者の術前術後の看護ケア、全身管理、院内の急変患者の受け入れ、重症患者の管理などの急性期の対応を行った。同時に入院時より計画的な退院支援を行い、在院日数の短縮と病床の有効利用を常に視野に入れたベッドコントロールを行った。

２）迅速な情報共有・問題解決を目標に、常に「患者様にとっての安全、安心とは何か」という視点で毎朝の申し送りや、病棟カンファレンスを行い業務の見直しを行った。

問題発生時は速やかにカンファレンスを実施し、安全に対する意識を高め、現状分析と対応策の改善を行った。

３）看護事務会、安全対策委員会と協働し５Ｓ活動（整理・整頓・清潔・清掃・しつけ）を行い、より安全で働きやすい環境を整えた。

4）COVID-19 感染対策として、個人防護具の正しい着用方法や正しいタイミングでの手指消毒の徹底に努め、感染予防手技の標準化や可視化のためのチェック機能を強化し、スタッフ全員が感染対策への高い意識を持って取り組んだ。

5）院内研修・院外研修ともに、感染対策が優先されオンライン開催の学会や研修会が多くなり、各自の生活スタイルを考慮した自己研鑽の形をとり知識・技術の向上やケアの質の見直しを行った。

6）COVID-19 に伴う緊急事態宣言や行動制限のなか、医療従事者としての自覚を持った行動を遂行し、勤務体制を維持するとともに、個人の身体的・精神的健康の保持ができるようワークライフバランスにも重視した

（4）今後の目標

診療科、疾患が多岐にわたっており、個別性に応じた高度な看護ケアを求められている。看護の質向上のため各々の倫理観や知識・技術の習得に努め、患者に安心し安全な入院生活を送って頂けるよう努めていく。また、受け持ち看護師の退院支援の役割についての意識を強化し、スムーズな退院支援ができるよう取り組んでいく。

北２階病棟（一般急性期内科病棟）

（１）看護体制・スタッフ

１）看護体制　　10：１（２交代勤務）

２）看護師（常勤）　　24名（内夜勤専属看護師１名）、（非常勤）１名

　看護補助者（常勤）２名、（非常勤）１名

　看護事務　　１名

（令和５年３月31日現在）

（２）特徴

４月から新興感染症（COVID-19）の受け入れを開始、病床数は16床で施設基準をHCU加算の人員配置とした。総室７部屋、個室３部屋に陰圧空調装置を設置し軽症から中等症Ⅰまでの患者を対象に受け入れた。主に大阪府フォローアップセンターからの依頼でありその他、本院から依頼のあった患者を中心に感染症分類5類に移行するまでの翌年５月７日までで合計219人、疑似患者276人を受け入れた。

防護服着脱の訓練とテストを年間に渡り毎月実施したこと、院内でのゾーニングの徹底で病棟内でのクラスターに至ることはなかった。コロナ患者の特徴として高齢者が多く、感染を契機にADLが低下し望む場所に戻ることができないなど退院支援に難渋するケースが多くあった。そのため施設からの患者は予め入院の期限を決め退院日を予測することで、回転率を上げ、スムーズに次の患者の受け入れにつなげるように調整をした。

＜病棟目標＞

１）院内クラスターを起こさない

２）受け持ち看護師を中心とした退院支援の充実

３）適切な人員配置で質の高いケアの提供と施設基準の堅持

（３）活動内容と評価

１）防護服着脱の訓練と手指消毒、ゾーニングの徹底で棟内でのクラスターに至ることはなかった。常に行政の最新情報を感染対策室と共有しマニュアルの改訂を随時行い適切に感染対策を実践した。治療後の一般病床への移動はウイルス量によって隔離解除時期を見極め慎重に行った。

２）コロナ罹患後は食欲低下やADL低下で隔離解除後も退院が困難なケースが多く、早期に患者・家族と退院後の生活について意思の確認を行うように受け持ち看護師を中心に関わるように努めた。また、施設患者に関しては解除日と共に施設に戻ることを入院時に決めておくことで少しでも新規患者の受け入れがスムーズになるように工夫した。

３）HCU加算を堅持するように患者数に応じて勤務者の調整を密に行った。特に夜勤は急な出勤や休みなどスタッフの理解と協力が必要であり・・感染対策のための閉鎖的な環境でのケアは事故につながることが予測されるため必ずペアを組んで安全なケアの提供に努めた。

（4）今後の計画

2023年5月から5類感染症に移行することが決まっており、感染症と一般患者の混在の中でのケアが必至となる。そのためなお一層の感染対策と最新の情報と知識を備えたスタッフ教育が必要となる。一般急性期病棟に戻ることで当院特有の疾患と治療・看護について学びを深めていき質の高い看護の提供に努める。

南３階西病棟（地域包括ケア病棟）

（１）看護体制・スタッフ

１）新型コロナウイルス感染症の受け入れに伴い休止していたため配置はなし。

（令和５年３月31日現在）

（２）特徴

地域包括ケア病棟は急性期治療を終えた後、在宅への退院を目指す患者さんにご利用いただく病棟である。また、在宅介護中のご家族の休息や旅行などの目的でのレスパイト入院は定期的な利用者も増えており大変喜ばれている。

患者さん、ご家族の意向を尊重し、安心して療養生活を送っていただけるように他職種と協働して入院前の日常生活に近づけるように支援している。

（３）活動内容と評価

【令和４年度病棟目標】

新型コロナウイルス感染症の受け入れに伴い病棟を休止した。

（４）今後の目標

令和５年度は新型コロナウイルス感染症が５類感染症となり、当院も通常の体制に戻る予定であるため、当病棟も再開する予定となっている。

受け持ち看護師を中心に退院支援に取り組み、患者さん・ご家族さんにストレスなく入院・退院していただけるよう努める。そのためにも、チーム活動が円滑に行えるようリーダークラスが固定チームナーシングの機能を理解して、患者の支援を行う。また、地域包括ケア病棟における施設基準の特徴を再度共通認識すること、自分たちの看護の質を上げることが患者獲得となることを理解しスタッフ全員が経営に参画しているという自覚をもって行動することが望まれる。これからの超高齢化社会、コロナ後の社会情勢の変化を適切に捉え柔軟に対応できる力が必要である。

南３階東病棟（医療療養病棟）

（１）看護体制・スタッフ

１）看護体制　　20：１（２交代勤務）

２）看護師（常勤）　　20名、（非常勤）２名

　　准看護師（常勤）　２名、（非常勤）３名

　　看護補助者（常勤）６名、（非常勤）３名

　　看護事務者　　１名

　　合計　37名　　（令和５年３月31日現在）

（２）特徴

医療療養病棟（療養病棟加算１）で50床の病棟である。

当該病棟は、後期高齢者が90％前後、脳疾患やパーキンソン病、認知症、誤嚥性肺炎などで意識障害を伴う患者さんや拘縮を伴い臥床で過ごす患者さんが大半を占めている。

経腸栄養を必要とする患者さんが50～70％前後を占め、担送患者さんが70％以上である。個々の患者さんの疾患に応じたリハビリテーションの介入や看護ケアを実施し安心して療養していただける環境を提供している。

他病院からの転院受け入れや急性期病棟からの転棟受け入れをスムーズに行い、医師、リハビリ担当者、MSW、近隣の住宅介護関連の方々と連携を図りながら、転院および在宅支援に取り組んでいる。

（３）活動内容と評価

１）食事介助、清潔の援助など日常生活の支援を通じて患者さん、家族の思いや不安を傾聴し気持ちに寄り添えるよう努力している。看護ケアの充実を図るためケアカンファレンスを通して、日々のケアを統一して看護の質の向上に繋げている。

２）意識障害があり意思を伝えられない患者さんが多く、尊厳を守って関わっている。家族とのコミュニケーションを大切にしながら、医師、リハビリ、MSW と連携を図り、個々の患者さんに適した看護ケアの提供と退院支援を行うよう努めている。

３）急性期病棟からの転棟受入においては、各病棟責任者に患者さんの状態を情報提供してもらい個々の患者さんに適した療養環境が整えられるよう工夫している。また、転棟後は家族と面談し、今後の方向性を確認して看護に生かしている。

４）終末期の患者さんも多く、患者さん、家族の意思に寄り添い、その人らしいエンドオブライフを過していただけるよう全スタッフとの情報共有を充分に行いケアに取り組んでいる。

５）平成30年より大阪医科薬科大学本院より口腔外科医師による口腔内診察、ケアを実施しスタッフと方法を共有することで日々の口腔ケアの強化を図り、誤嚥性肺炎予防に努めている。

（４）今後の目標

個々の職員が目標管理に基づいて自己研鑽し、ケアカンファレンスを充実させ、看護の質の向上を目指すことで、患者さんに安心安全で快適な療養環境を提供できるよう努力する。他部門、他部署と連携し、スムーズな入退院調整を図り、稼働率100％、医療区分（Ⅰ・Ⅱ）80％以上を維持目標として安定した病棟運営を行い病院運営に参画する。

北３階病棟（回復期リハビリテーション病棟）

（１）看護体制・スタッフ

１）看護体制　　15：１

２）看護師　　22名（うち夜勤専属看護師１名、アルバイト職員５名を含む）

　　准看護師　３名（うち夜勤専従看護師１名、アルバイト職員１名を含む）

　　看護補助者（常勤）７名

　　ケアアシスタント　２名

（令和５年３月31日現在）

（２）特徴

病床数32床の回復期リハビリテーション病棟で、施設基準は一般病床15：1です。

整形外科を中心に内科、外科など急性期治療が終了した後のリハビリテーションを集中的に行う病棟です。当病棟は、整形外科では骨折や関節障害、内科では脳梗塞や認知症、心不全、肺炎後の廃用症候群、外科では手術後のリハビリテーションを目的に急性期病棟から転入されます。

2022年の病床稼働率は、平均　　％、平均在院日数は　　日、在宅復帰率は　　％です。

当病棟は急性期病棟と連携を取りながら、リハビリテーション科や医療ソーシャルワーカーなど多職種が連携し、患者が住み慣れた地域に帰れるように、また早期に社会復帰ができるように働きかけています。高齢者が多いため地域医療連携室と連携し、介護申請など退院に向け早期の取り組みも行っています。

＜病棟目標＞

１）堅実な経営への積極的な参加

２）多職種連携、協働による積極的・計画的な退院支援

３）業務改善及び人材育成による安全安心なエビデンスに基づく看護ケアの充実

（３）活動内容と評価

１）急性期治療が終了した患者様がスムーズに集中した効果的な機能訓練ができるように転入受け入れを行っています。

２）リハビリテーション科との情報交換を行い、排泄行動訓練や病棟での自主訓練の内容など事故発生の危険性も高まるため患者指導の充実と環境整備に努めています。

３）毎朝の申し送りをはじめ、リハビリテーション及び医療ソーシャルワーカーと共にカンファレンスを毎日行い、進行状況や問題点の抽出、今後の方針などを情報共有し早期退院に繋がるよう取り組んでいます。また、回復期リハビリテーション病棟の機能が十分に果たせるように、週１回、回復期対象患者カンファレンスを行い、多職種で情報共有を行うことで効率的なベッドコントロールに繋げています。

4）三島圏域地域リハビリテーション看護連絡会に参加し、急性期・回復期・生活期のリハビリテーション関連病院と在宅機関との情報共有と連携を図っています。

（4）今後の目標

多職種との連携をより深め、統一したケアを実施し計画的な退院調整を行います。患者さんが安心してリハビリテーションに打ち込めるように、またスムーズに社会復帰が出来るようにスタッフとともに協力し、より良い病棟づくりに努めます。

外　　来

（1）看護体制・スタッフ

1）看護体制　　2交代勤務

2）看護師（常勤）　11名、（非常勤）　5名

　看護補助者　2名

　　合計　18名　　（令和5年3月31日現在）

（2）特徴

外来では、平日昼夜の通常診療及び専門外来・24時間救急診療・時間外診療の3本柱に加え、特殊検査や処置と多岐に渡る役割を担っている。外来来院患者数は年間58,387人（前年度50,030人）、救急搬送患者数1,916人（前年度1,017人）と前年度より大きく上回っている。また、地域のニーズに応えるべく「断らない救急」を目指し、いかなる状況でも対応できる体制作りへ強化し、多職種との連携協働はもちろん他病院・施設からの継続診療や転院受け入れを行った。

【診療科目】

・内科（循環器・消化器・糖尿病・神経・呼吸器・リウマチ膠原病・ペースメーカー）

・外科（一般消化器・乳腺）・整形外科・泌尿器科・脳神経外科・眼科・放射線科

・リハビリテーション科

【看護活動】

一人ひとりの患者さんの権利を尊重し「目配り・気配り・心配り」を合言葉に、苦痛や不安に寄り添い、急性期では苦痛の緩和、慢性期では疾患を抱えても在宅で生活できるサポート支援を心がけた。また、救急搬送患者さんに対しても、迅速で確実な医療と安全で安楽な看護ケア実践に努めた。

（3）活動内容

1）個々のスタッフが院内・院外研修に参加し、各種学会認定資格を取得して自己啓発に努め、外来受診の補助と安全で安心できる看護ケア実践の提供を行った。

2）高齢化社会が進み支援が必要な高齢者患者が増えており、個々の患者に応じた社会資源の提供、入院時から退院に向けての組織的な患者支援を、関連部署と連携を速やかに図り対応した。

3）入院日・時間調整では、地域連携室と連携を強化し待ち時間短縮に繋げた。

4）新型コロナウィルス感染対応に対しては、スムーズな救急受け入れ体制へ確立し二次救急病院としての役割を果たしている。

（4）今後の目標

1）専門性・特殊性の向上を目指し、看護外来を再構築する。

2）社会資源に対する知識を深め、外来通院患者が地域でその人らしく暮らし続けられるよう、必要な患者の見極めを行い多職種と協働して支援する。

3）待たせない診療環境作りに向けた業務改善に取り組む。

4）新型コロナウィルス感染症の感染対策継続を実施し的確なトリアージを実践していく。

手術室・中央材料室

（1）スタッフ

看護師	7名
中材スタッフ	1名
合計	7名

（令和5年3月31日現在）

（2）特徴

手術室は整形外科、外科、泌尿器科、眼科が共同にて3室を使用しており、令和4年度の手術件数は611件である。また内視鏡を使用した低侵襲手術や、日帰り手術、各臓器の温存手術など多様化するニードに対応した手術を実施している。中材は手術室看護師と専任スタッフとで運営しており、院内で使用する診療や看護に必要な器具、医療材料を一元管理し、適切な洗浄、滅菌を実施し院内の医療、看護を円滑かつ安全に実施できるように支援している。

（3）活動内容と評価

・「患者様に安全で質の高い手術室看護を提供する」を目標として、日々進化する手術に対応するだけでは無く安全や、感染対策について情報共有を行い、問題の対策、評価を実施し日々の業務に反映している。
・各科医師、麻酔科医、手術室看護師、病棟看護師、技術部門技師にてチームを編成し、必要に応じて術前検討や、カンファレンスを実施している。
・手術室看護師としての役割・責任を自覚できるように、業務分担を通じて各自の役割を明確にしている。
・洗浄・滅菌業務については、大学と連携し、リリーフ体制の構築や有資格者からの指導を受けることで質の向上を図っている。

（4）今後の目標

手術の多様化に対応するために、手術室看護師として、迅速・的確に状況判断できる知識や技術に加え接遇などの態度面も高めるられるような研鑽の環境を整える。

また、医師や臨床工学技士などの他職種者との連携を充実させるために意見交換ができる人間関係の構築を積極的に行っていく。

血液浄化センター

（1）スタッフ

1）センター長　　川床　友哉、辻野　拓也

常勤看護師　　5名
非常勤看護師　4名
看護補助員　　2名

（令和5年3月31日現在）

（2）特徴

・血液浄化センターは、血液透析、血液透析濾過、持続緩徐式血液濾過療法、顆粒球吸着療法など行っている。
・血液透析では入院や外来患者の血液透析の透析中の状態観察や血液データーの管理、食事指導や患者の日常生活の自己管理の援助を行っている。また、シャントPTAなどのブラットアクセスのインターベーション治療やバスキュラーアクセス管理も行っている。

（3）診療実績

シャントPTA　　165件
血液透析　　6503件

（4）今後の目標

・透析の専門職としての知識を高め、透析患者が円滑に透析生活を送れる様、質の高い看護を提供する。
・透析医療が地域医療に根ざした病院となるよう地域と連携を深め、患者のACPに関わっていける看護師の育成を目指す。